

## 1 た・づ・な

### 「育むことの大切さ」

社団法人 競走馬育成協会

副会長理事

吉田 武徳



昨年の10月に現職に就任いたしました。JRAでは育成関係の仕事に携わりませんでした。懐かしく思い出されますのが、学生時代に日本中央競馬会の日高育成牧場で育成馬の騎乗と手入れのアルバイトをさせて頂いた事です。大学の馬術部の3年生の頃ですから今から40年余り前の大昔になります。当時の育成牧場の施設は現在のBTCの日高事業所のところにあり、道路を隔てた西側には農林省（現農林水産省）日高種畜牧場の広大な牧草地が広がってありました。この広い場所で馬に乗れたらさぞ素晴らしいだろうと思いましたが、当時はここに競走馬の調教施設が出来るとは全く予想もできませんでした。ですから私がJRAに就職して20年近くたった頃、ここに英国、仏国の調教場に匹敵する広大な調教施設が完成したときにはその素晴らしさに驚かされました。

少し前置きが長くなりましたが、今回は育成業務と競走馬育成協会について少し

紹介をさせていただきます。現在、育成業務に携わっている牧場は日本全国で約400あります。近年、その多くは1990年前後の第二次競馬ブームの頃に設立され、先ほど触れましたBTCの調教施設が本格的に稼動しました1991年と時を同じくしており、BTCの施設稼動が育成調教の充実に大いに刺激になったことは確かです。育成業務がもっとも活発な地域は北海道で、1,2歳馬を中心に育成調教が行われています。1990年（平成2年）頃までは2歳の新馬戦になかなか馬が集まらず、JRAの番組担当者が大変苦勞されていましたが、最近ではクラシックを目指す多くの素質ある2歳馬が早期に出走し、2歳馬の競走内容が非常に充実してきております。これも育成調教の技術向上と施設が充実した成果と考えられます。

また、近年東西トレーニングセンター（トレセン）の周辺の育成調教施設も充実し、トレセンの受け皿として大きな貢献を

しています。特に栗東トレセン周辺にはトレセン内にあるのと同規模の坂路馬場を備えた育成牧場が数箇所あり、休養と言うよりはトレセン同様に実戦に向けた調教がなされており、これも関西馬の活躍の理由の一つと考えられます。

それから、多くの育成牧場はJRAへの調教スタッフの供給源にもなっております。JRAの競馬学校への受験資格には育成牧場での3年間(平成21年から2年間)の経験が必要とされており、多くの若者は育成牧場で騎乗技術等を習得・向上させ競馬学校を経てトレセンの厩舎で働くという経過をたどります。騎乗技術が優秀な者の多くがトレセンへ移り、さらに近年特に馬の仕事に参入する若者が減少したため、人手不足が牧場経営者にとって大きな悩みとなっています。昨年来の経済不況で、参入者が増加するのではという期待もありますが、根本的解決には賃金や福利厚生などの労働条件の改善とこの業界のPRが必要と考えられます。

現在、当協会では育成者の技術向上に対するモチベーションを高めるため、会員の牧場で育成調教した馬が指定したレースに勝つと表彰し、表彰金を交付する制度を行っております。またこの他にも講習会の開催、若手育成技術者の海外研修派遣事業、軽種馬生産育成強化資金利子補給事業などを展開しております。最近の競走馬の育成業務は、1,2歳馬の中・後期育成、現役馬の短期休養と調整等を中心に重要度を増しております。若馬のときにしっかりと体力をつけ、競走馬になってからは厳しいレースとトレセンでの強い調教によるストレスを解消し、体調を立て直す場としての育成牧場の必要性はますます高まっています。競走馬育成協会としましても全国の会員の皆さんと結ばれた‘たづな’をより強固なものにし、JRAひいては日本の競馬全体の発展に邁進していくつもりであります。今後とも皆様のご協力とご支援をお願い申し上げます。